

1、「日本の地政学」 日本が戦勝国になる方法 北野幸伯著 2020.12 出版

著者はロシア滞在期間 28 年で気鋭の国際関係アナリストだ。ロシアの現状に危機感を抱いて 2018 年に帰国した。この本の帯には、「日本は東洋のイギリス、中国は東洋のドイツ、習近平はヒトラー」とある。このキャッチコピーと副題に魅かれて購読した。

出版が 2022/4 のウクライナ・ロシア戦争前だったので習近平をヒトラーと比喻したが、プーチンが本当にヒトラーになってしまった。しかし習近平の個人独裁化が進みつつあるのでその比喻は外れてはいないだろう。台湾統一について従来の「武力統一を排除しない」から「武力統一もありうる」と最近の発言はより戦狼的になっている。

中国は愚かなゼロコロナ政策や民間の大手不動産会社のデフォルトも頻発し地方財政は破綻寸前だ。経済統計は殆ど信用出来ないが若干信用できる貿易統計や失業率から判断して経済はガタガタであるのは明白だ。GDP 世界 1 になるとの予想は淡い幻想となった。そして最近人口でもインドに抜かれた。

著者は共産党独裁の支配体制は脆く民主主義体制より脆弱と主張し戦狼外交は修正が出来ないので行きつく先はヒトラーと同じ運命だと説いている。併せて日本は東洋のイギリスとして進むべきと強く主張する。しかし与党の一部には親中派が多く日米同盟が外交の機軸との基本方針からはずれるような行動も散見される。2019 年 6 月安倍政権ですら習近平の国賓招致を計画した。2020 年春の新型コロナの発生で訪日中止となったのは幸いであった。最後に著者は、自由・民主主義・人権・言論の自由を尊重する道は、「正しい道」で「勝利する道」と力説している。



2、「インドが変える世界地図 モディの衝撃」 広瀬公巳著 文春新書 2019 年出版

2023/12 北インドのデリー、ジャイプール、アグラの世界遺産巡りに出かけた。この本は事前学習として読んだ。インドには 1982 年国際金融部勤務時代にボンベイ、マドラスを訪問した。当時は国際銀行間の決済ネットワークの基盤となるコルレス契約を締結する業務についていた。当時インドは紛れもなく貧民国であった。飛行場からホテルまでの砂塵の道路と信号待ちの交差点での子供の手が解けていたのが忘れられない。公園で見た足が像のような老人の姿も忘れ難い。

戦後のインドは人工が中国と並ぶ大国と言われたが、中国が 1979 年に米国と国交正常化し、2000 年に WTO 加盟で高度経済成長を遂げた。その為インドは中国の陰となり国際的に



その存在は薄くなった。その後中国との紛争からロシア寄りの外交方針だった。最近のロシアウクライナ戦争でもインドは中立の立場を崩していない。

しかし 21 世紀に入り GDP が増加し 2022 年に世界 5 位にまで成長した。2015 年以降の米中関係悪化で日米印豪の関係が大幅に改善され、インド太平洋安保体制が構築された。2023 年広島サミットでモディ首相とゼレンスキー大統領の握手は画期的な出来事だと思う。

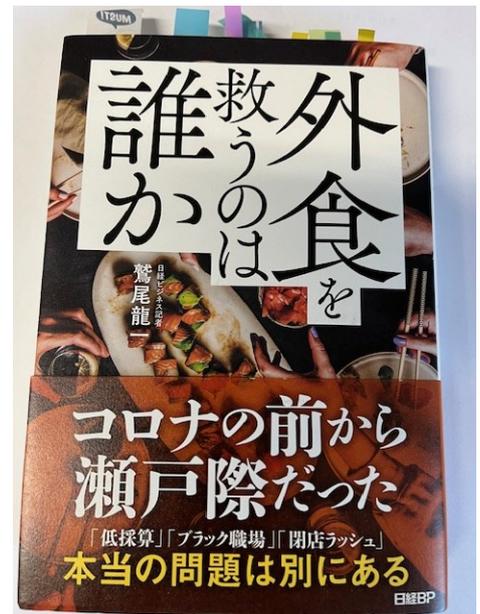
ところでインドは戦後長く国民会議派が政権を担って来た。しかし 21 世紀になってインド人民党が政権を担うようになった。10 年前にモディ首相が就任してから急激な経済成長が続いている。この本はインド躍進の背景と現状を分かりやすく解説している。

3、「外食を救うのは誰か」 鷲尾龍一著 2022, 11 出版

著者は読売新聞から日経ビジネスに転職した記者だ。タイトルと「はしがき」を読んで購入した。私は 10 年前に大手外食企業の常勤監査役になったが、著者の視点に共鳴できる点が多かった。彼は外食が「捉えどころのない産業」と呼んでいる。確かに外食にはユニークな点が多い。まず外食は産業区分として小売りサービス業に分類されるが、材料を調達し料理して商品を生産しているので製造業でもある。また特徴として参入障壁が低いので過当競争に陥りやすい。ランチタイムを外れると閑散となる「同時性の制約」がある。

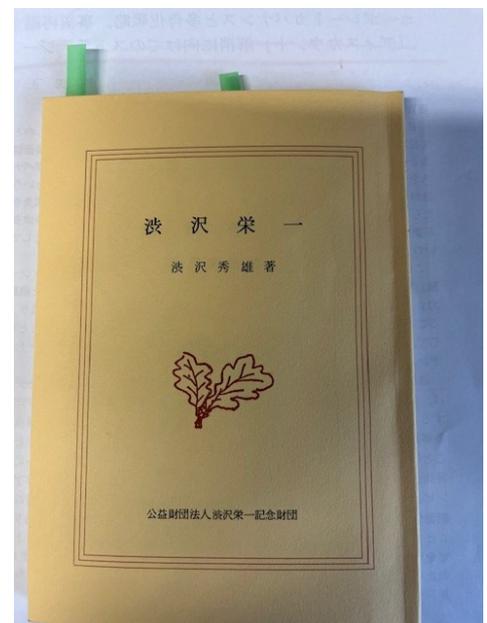
人手不足と離職率は 20 数年前からの大きな課題だ。また外食は強いブランドがないと飽きられ短期間で閉店となる店舗が多い。

多店舗展開型外食店が必ずしも成功するとは限らないのも事実だ。この本は、外食業界の宿命のような課題である低採算、ブラック職場、人手不足、閉店ラッシュという問題を解決するヒントを与えている。コロナ後の市場はライフスタイルの変化で新常态が生まれている。生き残りをかけた生存競争に挑む外食業界関係者に勧めたい一冊だ。



4、「渋沢栄一」 渋沢英雄著 1956, 10 出版

渋沢栄一誕生の深谷市に旅行した際、現地の「道の駅」で購入した。これは栄一の後妻の 3 男の著作で 120 ページ余の伝記である。渋沢翁の青年から老人になるまでの思い出風の随想で、所々に父との会話が記載されており面白かった。令和 2 年 (2019) までに 25 版を重ねるベストセラーだ。



5、「台湾 VS 中国 謀略の 100 年史」 近藤大介著 2021, 10 出版

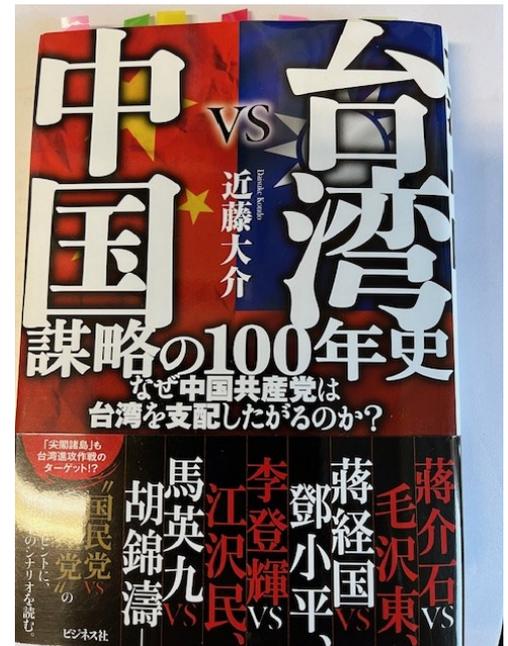
著者は 1965 年生まれで北京大学卒の中国専門ジャーナリス

トだ。この本は中台トップの変遷に沿ってこの100年の中台政治史である。

コロナ禍とその後の情報統制で最近中国情報は極めて少ないが、100年タイムで中国を眺めると習近平政権が毛沢東時代に戻りつつあることがよくわかる。戦後日本は奇跡の経済成長といわれたが、中国と台湾も同じように成長した。台湾については経済だけでなく政治にも奇跡のような変化があった。台湾2代目総統の蔣経国が李登輝に政権を移譲したが、その後20年近い戒厳令を解除し独裁体制から自由民主主義体制に混乱なくに移行させたからだ。

独裁国家が平和裏に自由民主主義に変貌するのは至難の技だ。戦前の日本は先の大戦の敗戦を機にGHQ占領の下で自由民主主義体制に移行した。ドイツも然りだ。残念ながら中華人民共和国は経済成長したが政治体制は独裁体制のまま。むしろ習政権は独裁体制を更に強化し監視社会と人権軽視の社会に邁進している。

2017年のトランプ政権誕生で対中貿易戦争が始まった。近藤氏は米中戦争を「横綱と関脇の戦い」と表現している。貿易摩擦開始から早8年経過したがこの見通しは正しかったようだ。しかし2年前のロシアのウクライナ侵略戦争勃発で台湾海峡の緊張が高まっている。「台湾有事は日本有事」と言ったのは今は亡き安倍総理だ。東アジア情勢の将来を考える上で大変参考になった。



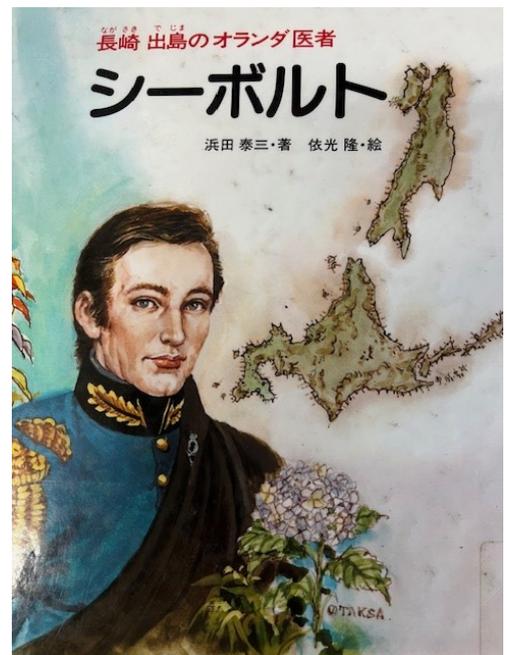
6、「シーボルト 長崎出島のオランダ医者」 浜田泰三著 1984年出版

2023.10.27の長崎旅行中長崎歴史文化博物館で「シーボルト来日200年企画展示会」を鑑賞した。そこでこの人物に興味湧きこの本を読んだ。

この本はシーボルトの足跡を少年少女向けに書かれた絵本で分かりやすかった。出島が長崎にあるのは何故か。何故オランダ人だけ貿易が許されたのか。長崎を幕府直轄にしたのは何故か。鎖国政策を取った江戸時代、医学技術学、通詞の役割、植物学、動物学、国際政治などいろいろ興味深い事実がわかった。

(注:「唐人屋敷」という中国との通商のため「陸の出島」も存在していた。そして中国との貿易額はオランダより遥かに大きく敷地の広さと滞在した中国人はオランダ人の数倍以上だった。)

さて来日してから5年目の1828年に帰国することとなった船が難破した。そして積み荷の中からご禁制の日本地図が発見された。これがいわゆる「シーボルト事件」の始まりだ。彼は罪人となり翌年国外追放となる。しかしシーボルトは欧州に機密情報や芸術作品を帰地帰った一方、日本にも医療技術や天文学を始めとする進んだ科学技術が輸入された。19世紀前半欧



米露が日本の植民地化の野望を未然に防衛した功績も大きいと想像する。

なお長崎で妻のお滝（タキ）と一人娘のイネの生涯についても興味深い。シーボルトは帰国後ドイツ人と結婚しタキも日本人と再婚した。一人娘のイネは明治時代を逞しく生き抜き日本人初の産婦人科女医となっている。明治天皇の出産にも立ち会っており、司馬遼太郎著の「花神」では大村益次郎との交際も描かれている。

7、「文政11年のスパイ合戦 —検証・謎のシーボルト事件」 秦新二著 文春文庫 1996年出版
著者は東京外大（オランダ語）の学生時代（1970年代）に、シーボルト・コレクションが膨大と言われている割に現存する収集物が少ないことに気づいた。それがシーボルト研究を始めた動機と書いている。

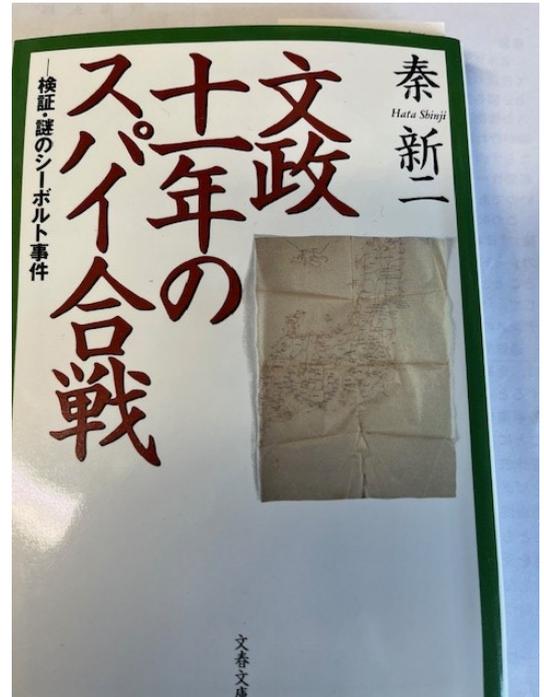
この本はタイトルの通りシーボルト事件の謎に迫るものだ。日本地図を盗もうとしたことは事実で日本側の協力者は死罪だった。しかし彼は国外退去で済んでいる。江戸城見取り図などその他の国家機密情報も持って帰国している。コレクションは植物、動物、地理、生活文化、医学、経済、社会に関する書籍と陶器・漆器・絵画などの芸術品（以下「財宝」と呼ぶ）などだ。（注；オランダ・ライデン博物館には「日本地図」も保存されている。日本地図は複製されていたと推定される）

シーボルト在任5年間にオランダに運んだ財宝は木箱で数百以上だった。彼は医者であり医学を基盤にして日本で門弟を教える傍ら情報収集に勤めた。博物学にも通じており日本の協力者を得て効率的に収集した。

他方で江戸幕府も海外の進んだ科学技術と国際情報は必要としていた。特に医療と医学に関する技術と知識は遅れていたもので積極的に収集した。背景に19世紀初頭から日本近海に多数の異国船が出没しており幕府は悩まされていた。

因みにシーボルトは財宝を欧州の権力者（オランダ国王、ドイツ権力者、ロシア皇帝など）に高価な値段で売却し財をなした。相当有能で野心家で商売人であったといえよう。そして1854年に日本が開国すると1859年息子と共に再来日して江戸幕府の顧問となっている。

著者は半生を掛けてシーボルト・コレクションを収集し彼の生涯を研究した結果、独自の視点でシーボルト事件の「裏」と「奥」にある国内事情を推理検証している。幕府（将軍家斉）と島津藩（元藩主である重豪）との確執（権力闘争）が背景にあったことを推理している。なお単行本は1992年出版されており、同年の日本推理作家協会賞を受賞している。



以上